

大地協ニュース

大地協ニュース復刊 第17号

発行元：NPO 法人 大阪市地域福祉施設協議会

企画委員会《広報宣伝部》

発行日：2022年12月 第17号

担当窓口：望之門保育園 佐伯 剛

TEL 6651-7741

Fax 6652-8841

大地協の最新☆情報は右記 →

QRコードをご覧ください。



2022年も本誌記事を通じて地域福祉に携わる皆様の温かい思いに力を頂きました。ありがとうございました。

2023年もたくさんの笑顔に出会えますように…。

夜間保育 ～保育現場の様子とこれから～

1970年代より女性の社会参画に伴い、ベビーホテルが増加し劣悪な保育環境の下で幼い命が消えていくという悲しい事故が多くあり、「ベビーホテル問題」として社会問題化されていました。そんな中、1986年にナルド夜間保育園（以下ナルド）は多様化する就労形態の支援の一つとして開園しました。阿倍野区は古くからの商店街、商業施設が立ち並び、また近辺には総合病院が多くあることから夜間保育を必要としている方が潜在的に存在しているのではないかと考えていました。開園当初は定員割れではあったものの少しずつ夜間保育を希望される方も増え、今では「夜間保育があるから」と入園される方もいらっしゃいます。

『夜間保育ってどんなところ？』

「夜間保育園」と聞くと大抵の人は「夜まで子どもを預かるなんて…」 「何をして過ごしているの？」といった反応が返ってきます。それらの多くはどちらかといえばマイナスなイメージの言葉。でも、実際は昼間の保育園と何も変わることはありません。夕食の時間ではコロナ禍でパーティーション越しの夕食ではありますが、お友だちの顔を見て話し、時にはふざけあひながらの食事は笑いが絶えません。そして、「ごはん食べたなら〇〇して遊ぼう!」と夕食後の時間を楽しみにしている様子もうかがえます。ナルドでは夕食後は0～5歳児までが同じ保育室に空間を分けて過ごしているので、時には0歳児と一緒に遊べる年上のこどもたち。「かわいいな」「歩いた!」と0歳児の成長と一緒に喜ぶ姿が見られます。「みんなこんな風にして大きくなったんやで」と伝えるととても不思議そうでもあり、うれしそうに自分が赤ちゃんだった頃の話聞いてくることも。こういった時間は保育園ではなくどちらかといえば「おうち」に近いかもしれません。

『これからの夜間保育』

コロナ禍で日々の保育の見直し、子どもや職員の体調管理、消毒の徹底、保護者への対応などコロナの感染対策だけでも、これまでとは大きく変わりました。加えて、事故防止対策…。皆さんの施設でも大変ご苦労されていることと思います。そんな中、保育園での事故や事件が連日のように報道されています。このようなことが起こるにはそれぞれの背景があり、一つの要因だけでなく様々なことが絡み合っていることではありますが「他人ごとではない」というのが正直な思いです。ベビーホテル問題が社会問題化され、子どもたちが夜も安全にそして安心して過ごすことのできる場所として作られた夜間保育園だからこそ、子どもたちの命と心を守りたいと強く願います。

ここ数年、ナルドは夜間保育の利用者が減少傾向にあります。少子化、コロナ、就労形態の多様化など様々な要因がそこにはあります。しかし、少数であっても夜間保育を必要とする親子はゼロではありません。今、目の前にいる子どもたちが将来、保育園時代のことを振り返った時に「ナルドが楽しかった」と思い出になるような温かい居場所でありたいと願います。「また、明日ね!」と笑顔で帰り、「おはよう!」と元気に登園してくる当たり前の日常が幸せなことだと感謝しながら日々を過ごしていきたいと思っています。



社会福祉法人 阿望仔

ナルド夜間保育園 園長 森舎 孝子

今回は、私たちの施設も加盟する「わが町にしなり子育てネット」(2000年に発足。約70団体加盟)が保育施設に所属していない子どもと保護者に焦点を当て、地域施設のスタッフや住民が協力して取り組んだ「第17回西成大好きふれあい運動会」について書かせていただきます。今回は私がリーダーを務めることになり、「現代の子育て・子育てにあった行事を開催できるように」と

いう点を第一に考えました。当初から掲げてきたねらいや、継続的に実施されてきたプロ

グラム等を見つめ直し、『乳幼児親

子の親睦と交流を深めるとともに、高齢者とのふれあいを楽しむ』というねらいを掲げ取り組みました。日々の活動のなかで繋がった親子からこんな嘆きがありました。「最近では電話予約の必要なあそび場が増えているけど、なんか面倒というか、しにくいというか、当日の朝にならないと気持ち(親子共々)も分からないから…結局、家にいることが多い。だから、同じ世代の子と関わらせてあげる機会が無いんです」コロナの影響で予約制が主流になってきていることや、電話をかけること自体ハードルが高くなっているスマホ世代の子育て層の事実を知り、結果、子育て・子育てに孤立が生じているのではないかと感じました。

上記のエピソードを踏まえ、コロナ禍で3年ぶりの運動会開催では、子育て・子育て世代の方々にとって、参加へのハードルを下げる工夫を行い、開放的な機会になるよう注力しました。その結果、事前申し込みなしの当

日参加が、以前よりも大幅に増えることにつながりました。参加者の方々の楽しそうな姿を見て、改めてこのような活動や場所、機会の大切さを感じました。しかし一方で、その場限りの参加となった方もいたのではないかと、参加した方それぞれのニーズに合った居場所や関わりにつなげきれなかったのではないかと、という課題も見えてきました。不景気、核家族、そ

れに交えてコロナ禍…社

会全体が閉鎖的になりつつある今、私たちは、保育者、地域福祉

施設職員として何ができるの

でしょうか。今年度、西成大好き

ふれあい運動会のリーダーという大役をいただきましたが、思っていたより負担なく成し遂げることができました。それは、周りの協力やたくさんの支える力があつたからです。大地協の中で、地域子ども研究会の代表もやらせていただいています。同じようなことを感じます。それは、一人で成し遂げてはならないものであり、一人では成し遂げられないものであること。自分の力を引き出してくれる、周りの様々な力がたくさんあることです。自分がたくさん支えていただく立場にたつて、人が成長していくにはこれらが必要不可欠だと改めて感じ、うまく言えませんが、「子育て」と似ているなとも思いました。

これからも、様々な人たちと、今、目の前にある現状を観ながら、子育てをより豊かにする方法を模索し、安心して、共に成長し合えるつながりや居場所づくりに励みたいと思います。

社会福祉法人石井記念愛楽園 今池こどもの家 山田 夢果

卒業してもここはみんなの居場所

育徳園子どもの家では2016年から毎月1回中学生以上会議を行っています。目的としては、居場所づくり、地域のリーダー育成のために、各施設で取り組んでいる活動を参加者全員で深め、地域に存在する、多様な課題について柔軟に自分の意見を述べ、また自分の価値観と違う人たちの意見を取り入れ、答えの見つけづらい課題について様々な意見角度から、全体の意見を創り出すこと。話す内容は、社会問題・職業関係をこちらで選び、職員又は保護者が話していました。2022年度からは子どもたちの要望で、自分たちが聞きたい・知りたい内容を提案するといった子ども主体で進めている。

中学生以上のキャンプはこれまで4回行っている。講師を招いて、性教育・自然エネルギー・虐待・在日韓国人であること・フリースクールの話をしていただいた。どれも学校では学べない内容で子どもたちの見分が広がった。子どもたちも自分たちが興味のある社会の問題について調べ、発表する時間もあり、2022年ではブラック校則・外国人労働者と日本人労働者の違い・BPO(放送倫理番組向上機構)とは?・不登校・ジェンダーについて発表し、みんなでこれらの問題を考えた。今回初めて児童部会に中学生～大学生の子たちが参加することになり、そこで子どもの権利条約について学んだ。

《参加者の感想》

子どもの権利条約について、中高生が学ぶ機会はとても少ないと思う。ただ、このような機会があることで、自分たちにどのような権利があり、どのように活用することができるのかを知ることが出来ました。今世界では、子どもの権利条約が約束されていない子どもたちがたくさんいて、私たちが学校などに行けていることは、当たり前ではない。なので子どもの権利条約を学ぶ機会をもっと増やしていくべきだと考えました。以上、私自身これからも中学生以上の活動が続け、子どもたちにとって安心できる居場所を1つでも多く作れるようにしていきたいと思います。

社会福祉法人育徳園 育徳園子どもの家 上西 貴之



学びと繋がり の場 / 障がい児・者研究会

私は大学院の博士課程で社会福祉を専攻しており、社会福祉について知見を深めたいと考え、友人に紹介していただき、参加させていただきました。今年で2年目になります。

定例会では、毎回様々な社会問題やテーマを話し合うことで様々な学ぶ機会を与えていただいています。

みんなのしゃべり場は、これまで2回開催され、参加しました。教育・医療・福祉など支援に関わる方、学生の方が参加されており、様々な現場の話やそれぞれの悩みを聞くことが出来ました。子どもとかかわる悩み編や、現場で子どもや保護者対応をそれぞれの施設の方法を情報共有し、一緒に考えることができました。

「子どもの育ちの中で 障がいを考える 子ども権利条約の視点で…」関口淑枝先生（子ども権利条約関西ネットワーク代表）のご講演では、子どもの権利条約について、日本は毎年勧告を受けている現状や子どもを取り巻く問題を知ることが出来ました。子どもの権利は、大人が守ってあげるべきものということを考えられがちですが、子ども主体で行われているかわさき市の取り組みなども聞き、子ども自身に権利があり、主体になって考え、行動することの大切さについて深く学びました。

「子ども理解を深めよう～一人ひとりの子どもの感じ方の違いを学ぶ～」木曾陽子先生（大阪公立大学現代システム科学研究科）のご講演では、一人ひとりの子どもが違うことを前提にしてインクルーシブな社会について考えることができました。また具体的な手立てを詳細に教えていただくことが出来ました。

新型コロナウイルス感染症の蔓延により、孤立を感じたり、生きることに苦しさを感じたりしている人が増えているという話を聞きます。このような時だからこそ今まで以上に人と人との結びつきや支えあうことが大切であると考えます。これからも研究会のメンバーの皆さんや地域の皆様と一緒にしながら自分にできるのかを考え続けていきたいと思います。

常磐会学園大学 白川 晴美

全国研修会を3年ぶりに対面で開催します！！

社会福祉法人興望館の萱村竜馬と申します。東京都東地区地域福祉施設協議会（東地協）の事務局を担当させていただいています。

今年度、3年ぶりに対面での全国研修会の開催を企画しています。過去2大会はこれまでに例のないオンライン開催を大地協の皆様が担ってくださり、そのご苦労と心意気にただただ頭が下がりました。前回、前々回のキーワード「共生」＝「ともに」を引き継ぎつつ、当事者性を強く意識したという大地協の特徴に対して、私たち東地協の特徴を振り返り、今回のテーマを地域福祉とその未来に向かうベクトルを意識して、「地域福祉の未来～ともにたがやす～」としました。

日地協の全国研修会は、セツルメントという私たちの働きのルーツに触れ、原点に立ち返って、それぞれの地域にもどり、目の前のひとつひとつの働きを積み重ねることを大切にしていると感じます。100年前にセツルメントという手法をとり、自らが地域に暮らす住民となつてともに生きようとした先人たちは、そこにある生きることの豊かさをともに共有していたのだらうと想像しています。

いまは社会も技術も時代も大きく様変わりし、当時に比べ様々な制度ができ、社会福祉法人の運営が安定した側面もあります。一方で、実践者と

して自らの自由な働き、肌感覚の気づきから生みだす働きが減っていることも自戒しています。

今回の企画にあたって、チャレンジしよう。つくることを楽しもう。10年後、20年後を想像しながら自分も周りの人も育っちゃおう。と話しながら準備を進めてきました。分科会も「アートとセツルメント」「食支援のその先」「次世代の担い手からの発表」「多様な障がいと多様な生き方」「地域福祉と災害」といった横断的なテーマを取り上げて、企画に初挑戦のメンバーもいます。

ここ数年のコロナ禍に、私たちは何を一番大切にするかを振り返る時が与えられました。東地協の元名誉会長布施英雄先生が残した、『同業者大会でも、地域福祉学会でもなく、親睦会でもない。福祉の現場に人生をかけて働く仲間が、願いと痛みと喜びを負って集まる集会である』という言葉が心に残っています。時代を超えて先人と繋がり、空間を超えて同時代の仲間と繋がり、セツルメントという言葉にとらわれることもなく、自由な働きを生き生きとつくりたいと思っています。当日、皆様が顔を合わせる場づくりに携われる喜びを感じつつ、感謝して、励んでまいります。

社会福祉法人興望館 萱村 竜馬

《 第27回 全国地域福祉施設研修会開催のご案内 》

- 日時 ■ 1日目 2023年2月18日(土) 13時00分～17時30分 2日目 2023年2月19日(日) 9時00分～12時15分
- 会場 ■ 両国国際ファッションセンター(KFCホール)およびオンライン 申込受付は2023年1月上旬から開始予定です

長居保育園の歩みと 子どもの最善の利益への思い



今から70年前の昭和27年9月、長居の地に園児16名、職員2名の小さな保育園が生まれました。創設者は理事長である宮川ヒサです。当時は、戦後間もない頃で、理事長が若かりし頃に街を歩いていると幼い子どもたちの悲惨な暮らしを日常的に目にし、その度に胸を痛め自分にも何かできることはないだろうかと祈るように考えていたそうです。

ある時、偶然保育者養成校の看板を見かけ、まるで使命を受けたかのように感じ、迷うことなく保育の道に進み、資格が取れた年の9月から借家である自宅を開放して保育を開始しました。地域の人々との関わりの中で切実さと必要性を感じて突き動かされるように、早い時期から乳児保育や障がい児保育に取り組み、卒園した子どもたちの居場所がなくて困っている保護者の声を聞くと学童保育も行うようになりました。物が充分でなかった時代、また制度も整わない何の保証もない中、新しい事業を立ち上げるのは並大抵の苦労ではなかったでしょう。しかし、理事長からこれまで多くの方々に支えてもらった感謝の言葉は何度も聞きましたが、辛かったという内容はほとんど聞いたことがありません。

今残る記憶として不満や不安よりも希望と感謝の思いを抱きつつ生き生きと勤しんでいた記憶の方が大きいという事から人との交わりがどれほどの力と豊かさを生み出していたのかが窺われます。支援者というより、全ての人の幸せを願い地域の中で共に歩んでいたのだと思います。

この創設当初から変わらない福祉に対する理念を私た

ちも微力ながら引き継いでいきたいと思っています。

私たちは様々な家庭と出会います。中にはケースの重さに私たちが受けられるのだろうかと入園自体を迷ったり、支援の過程で、悩み、前に進めなくなることがあり、私自身一人ではどうすることもできずにいる弱い存在であることを思い知らされることがあります。しかし、支援する立場にいる人間が強くて力があるから受け入れるのではないということ、また、そこからしか生まれない喜びがあるということを理事長や先人の先生方がはっきりと示してくださっています。このことに勇気づけられながら、これから出会う方々に「一緒に歩いて行こう」と変わらず言える自分でありたいと思っています。

今は天国におられる小椋先生がお元気な頃、ある研修でお話してくださった「福祉は、まだ見ぬ人の苦しみをも想像して動く仕事」だという言葉が忘れられません。まずは、目の前の子どもたち、地域に関わり状況を知ることが必要で、そこから見えてくる課題に気づき、一つ一つ取り組んでいくことが大切なのだと思います。また取り組んでいく中で、心で感じた課題、提案にならないくらいのつぶやきもスタッフ同士気楽に話せる環境も必要です。そこ



から具体的な活動に繋がられた経験と結果が次に進む原動力となります。その意味でも他施設と共に協力し合える基盤がある大地協は、一人の力、一施設の力ではできないことを皆と協働し、子どもたちの最善の利益として実現できる場だと思っています。

築き導いてくださった多くの先生方に感謝し、思いを引き継ぎ、これからも共に学びながら、私たちにできることを模索していきましょう。子どもたちのため、地域のためと起こした行動が後に、大切にされた経験、安心感として子どもたちに伝わり、次は子どもたち自身がこれから出会う人に伝えていく・・・先行きが不透明な時代だからこそ一人一人が幸せだと感じられる社会、ぬくもりの連鎖が失われない社会が実現できますようにと願い、できることから丁寧に向き合っていきたいと思っています。

